

ハイデガーの技術批判への F. G. ユンガーの関わりについて

山本 與志隆

序

M. ハイデガーとエルンスト・ユンガー（以下、E. ユンガー）の間に個人的親交があり、相互に60歳の記念論文集に論稿を寄せ合うほどの間柄であったことはよく知られた事実であり、近年、両者の間で交わされた書簡集も出版されたところである。そのつながりはそれぞれの思惟の核心にも及び、ハイデガー自身が後期の技術論を形成するに際して、E. ユンガーの思惟に多くを負っていることを認めるほどであった。こうした影響関係については以前に幾つかの論考において論じてきたところである。

さて、E. ユンガーには三歳下の弟、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー（以下、F. G. ユンガー）がおり、こちらも上述のハイデガーの60歳の記念論文集に兄とともに寄稿していることから、ハイデガーから見て単なる「友人の弟」以上の関係であったであろうことは想像に難くないところであった。このF. G. ユンガーには『技術の完成 (Die Perfektion der Technik)』¹⁾という著作があり、そのタイトルから兄のE. ユンガー、さらにはハイデガーとも当時の科学技術に対する問題関心を共有していたであろうことが伺い知れるところである。この書が先頃邦訳されて我が国にも広く知られるようになった際、その内容を一読して、ハイデガー研究者として少なからぬ驚きに捉えられた。まず、邦訳書の帯に大きく「技術文明の本質を多方面から根本的に考察し、ハイデガーにも影響を与えた技術批判論の重要作、本邦初訳。」（強調は山本による。以下、断りのない限り同様。）と謳われている。なんと、関心を共有しているどころではなく、むしろ『技術の完成』こそが、ハイデガーの技術論に影響を与えたというのである。実際のところ、本書の訳者解説においても、ユンガー兄弟の思惟と

1) Friedrich Georg Junger, *Die Perfektion der Technik*, (Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1946). 邦訳は、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー『技術の完成』(F. G. ユンガー研究会訳、人文書院、2018年)。以下、本書からの引用については、PTの略号の後に原著第7版(1993年)のページ数を記し、邦訳のページ数を併記して示す。

ハイデガーの技術論の類縁性について言及されており、ハイデガーと F. G. ユンガーとは1942年に、まさにこの書の出版準備を契機として知り合ったという事実が記されている²⁾。ハイデガーの技術論が公にされるのは第2次大戦後の1947年のプレーメン公演が初めてであることを考え合わせると、確かにハイデガーはそれに先だって『技術の完成』の準備原稿に目を通していたことになり、「ハイデガーに影響を与えた」という謳い文句も決して故なしとはしないと考えられる。

そこで本論考においては、それ自体としてもなかなか理解の及びかねるハイデガーの技術論を解釈するために補助線を与えるものとして、F. G. ユンガーの『技術の完成』を取り上げ、両者の思惟の一端を明らかにすることを試みたい。以下、本稿は次の3つの節に分かたれる。

1. 『技術の完成』の技術批判の視座と人間存在
2. 『技術の完成』における時間概念と自然科学
3. 『技術の完成』における労働者と総動員

そして、最後にハイデガーの技術論の理解に向けて、ユンガー兄弟とハイデガーとの架橋を試みたい。

1. 『技術の完成』の技術批判の視座と人間存在

今回取り上げようとする F. G. ユンガーの『技術の完成』の翻訳に至る経緯について、序で示した本訳書の訳者解説1の中では次のように述べられている。

進歩とリベラリズムへの懐疑がうずまき、文明が人間にとっての脅威と感じられた二十世紀前半のヨーロッパで、「技術が全体として人間に与える影響」を明らかにしようとしたこの『技術の完成』は、当時の技術批判の集大成と見ることができ、地球の隅々、人間生活のあらゆる領域に技術が浸透した今日こそ、詳しく論証されるべきではないか。これが、我々がフリードリヒ・ゲオルク・ユンガーの技術論に取り組もうと考えた理由である。(邦訳、pp. 282-283)

また、この書は、『西洋の没落』（1918/1922年）で終末論的技術論を展開した O. シュベングレー、『人間と大地』（1913年）でエコロジー思想の先鞭をつけた L. クラークス、「保守革命」思想家 E. ニーキッシュ等の技術論、そしてもちろん兄 E. ユンガー

2) 邦訳の後ろに付された訳者解説1、今井敦「技術を巡る交友、ユンガー兄弟とハイデガー—『労働者』『技術の完成』『技術への問い』を繋ぐもの」、pp. 300-302を参照。

の「総動員」(1930年)、『労働者』(1932年)からの影響を受けるとともに、序で述べたように、ハイデガーの技術論への少なからぬ影響を与えたと言われている³⁾。以下ではこの点について幾つかの観点から吟味していきたい。

まず F. G. ユンガーは、「技術は我々人間に何をもたらすか」という問いでもって、この『技術の完成』を論じ始めている。そこで問題にされるのは一般に抱かれている技術に関する二つの期待が、幻想であるという事実である。すなわち、一つには技術は人間に富をもたらす、という期待であり、二つには技術は労働時間を減少させることで「ゆとり」と自由な時間をもたらすという期待である。

一つ目の期待に関しては F. G. ユンガーは、次のように言う。

技術は富を生んだりはしない。だが技術の仲介により、我々のもとに富が運ばれ、加工され、消費される。そこで起こっているのは絶えず増大し、力強くなるばかりの、とどまることのない消費であり、地球上にこれまでなかった規模の収奪 (Raubbau) である。仮借ない、次第にエスカレートする収奪こそが、現代技術の特徴なのだ。そして、その収奪のみが技術を可能にし、技術を開花させる。この事実を無視する全ての理論はゆがんでいる。なぜなら、そうした理論は現在の労働や経済活動の前提条件を隠しているからである。(PT, S. 28、邦訳、pp. 41-42)

ここで F. G. ユンガーは、技術と富に関する一般的な期待を打ち消す形で技術の本質を語っている。技術のもとに見出されるのは「絶えず増大し、力強くなるばかりの、とどまることのない消費」であり、それは「地球上にこれまでなかった規模の収奪」であるとされる。しかもその「収奪」は「仮借ない、次第にエスカレートする収奪」であり、まさにこれのみが「技術を可能にし、技術を開花させる」ものとして、現代技術を根本的に特徴づけると言われている。ここで我々は、別の拙論⁴⁾においてすでに明らかにされた E. ユンガーとハイデガーの技術の規定との相同性に思い至る。というのは、この文脈において「収奪するもの」と「収奪されるもの」とを改めて考えてみるならば、前者はこの絶えざる収奪を根本特徴とするものとして、現代技術そのものであると考えられる一方で、後者は差し当たりはまず自然がそれであると

3) その他に「近代のエコロジー論争を先取りした、驚嘆するほどに広い視野を持つ本」(社会学者 S. プロイアー)という評価(邦訳、p. 282)も紹介されているが、本稿ではこの観点については深くは触れない。

4) 拙論「ハイデガーの技術論における人間存在—E. ユンガーの思想との交錯」(『倫理学研究』(関西倫理学会)第49号、88-104頁(2019年))参照。

考えられる。しかし、収奪されるものは自然にとどまらない。その収奪は人間自身にも及ぶと考えられている。そしてここで我々が考えるべき重要なことは、この「収奪するもの」が、特定の国家や、何か企業や公共団体のような社会集団ではなく、ましてやどれほどの権力を有するにせよ、ある特定の個人でもなく、そうした集団や個人によって担われていながら、その中心にあって全体を主導する確たる指導者が存在しない状況における、技術そのものであるという点である。この点はまさに兄 E. ユンガーの「総動員」論、ハイデガーの「総かり立て体制」の議論に通じるところである。

このことと関連して、技術に対する一般的なもう一つの期待の前提について、F. G. ユンガーは、次のように言う。

今日技術によって人間は労働 (Arbeit) から解放されると広く一般に信じられているばかりなく、人間はこの労働の減少によってゆとり (Muße) と自由な活動を手に入れるとも信じられている。こういった信仰は多くの人々にとって揺るがし難いもの、自明なものとなっている。(PT, S. 14, 邦訳、p. 22)

こうして技術的進歩への支持と正当化の根拠が与えられ、いわば「バラ色の未来」が保証されるはずなのであるが、しかし多くの人々にとっては労働の減少は「ゆとり」や「自由な活動」には結びつかずに、空虚な無為の時間となってその生に押し寄せる、と言う (PT, p. 14, 邦訳、23-25頁)。つまり、技術の進歩発展によって、それまで多大な時間をかけてなされていた労働が軽減されることによって生み出される時間は、決して人々の生を豊かなものにする「ゆとり」になるとは限らないということである。では、なぜそうであるのか、と問わなければならないが、その答えの一端は、上述の「絶えず増大し、力強くなるばかりの、とどまることのない消費」あるいは「仮借ない、次第にエスカレートする収奪」の背後にあるものとしての、ニーチェの言う「力への意志」の内に存すると考えられる。例えば、別の箇所でも F. G. ユンガーは、次のように言う。

機械的完成の状態に調和のイメージを結びつけること、政治的・社会的理想郷を、それぞれある筈もないところに見出そうとするのは、夢物語にすぎない。ゆとり、自由、富といった観念もまたユートピア的である。人々が未来に想定する平和、裕福、幸福といった観念もまた、ユートピア的である。(PT, S. 157邦訳、p. 222)

このように言ったあと、F. G. ユンガーは「機械とは幸福を授けてくれる神ではないし、技術時代が最後にもたらすのは平和で愛すべき牧歌的生活ではない」と言う。ここにすでに機械を用いた技術時代のありようが言明されている。一般に、人間は近代以降、客観的自然科学の成立とともに、自然を対象化して支配し、自らの統制の下に置くことによって、いわばかつての神の位置に立ったと考えられている。そしてその自然を支配するために創出されたものが機械的技術にはかならない。ところがその機械的技術の完成は決して人間に「ゆとり、自由、富といった観念」あるいは、「平和、裕福、幸福といった観念」を与えるわけではないのである。というのは、上述のように、技術は徹底的に「収奪」を前提しているからである。

技術は収奪を前提しており、技術の進歩とともに収奪は増大していくから、完成の域に達したときに技術がこれまでなかったほど包括的かつ強力に収奪するであろうこと、地球的規模で組織化された収奪、この上なく合理的な方法による収奪が実行されることは想像に難くない。(PT, S. 157f.、邦訳、p. 223)

技術の前提としての収奪は、これもやはり技術と結びついた資本主義の下で、すべてを奪い尽くすまで止まるところを知らない。そこに見られるのは、際限なく自己拡大を目指す「力への意志」である。つまり物的資源としての自然も、また人的資源としての人間存在も、あらゆるものを使い尽くして、その後には「土地搾取」によって、(アメリカに見られるように)大規模な荒廃だけが残され、砂漠化がすさまじい勢いで進むという。つまり、資本主義と結びついた機械的技術の完成によって、人間の労働が合理化され、それに基づいて人間自身が労働力として、労働遂行に駆り立てられることになるのである。その意味では人間は神になるどころか、労働のためのエネルギー供給源に成り下がる。

損失経済は全ての領域に及び、技術的組織の内に、人間もこれを免れることはできないのだ。次第にはっきりしてきているが、技術の全領域で進む浪費はひどく大規模になり、その機械的重圧の下で、人間はくず折れてしまう。完成された技術は人間にも持てる力以上のものを要求するから、人間は長くは応えることはできない。(PT, S. 158、邦訳、p. 223)

このようにして、完成された技術によって過重な圧力が掛けられることによる一つの徴候が精神的、肉体的活動に見られる「痙攣」であると言われる。その結果として力が過度に張り詰めたときに現れる反作用としての「疲弊、無気力、呆然たる敗北

感」であると指摘されている。

一方、このような技術によって実現される「労働工程」について次のように言われる。

技術の労働工程を眺めていると、とりわけ一つのことを目に付く。工程がどんどん自動化されていくということである。技術の進歩とは、あらゆる種類の自動機械アウトマートが増えることと同義である。(PT, S. 38、邦訳、p. 56)

この記述は、技術によって多くの労働工程が自動化され、自動機械がその工程を担うことによって、人間は労働時間から解放されるであろうという期待を半面において裏づけている。確かに「機械的な」という形容で以て称されるような労働は文字通り、「自動機械」によって代替可能であるから、これが導入されることによって従来その仕事を行っていた人間はその仕事をする必要がなくなる。したがってそれまで当該の労働に割かれていた時間を別の事柄に用いることができるとすれば、それはまさに「労働時間の減少」の実現と言うことができよう。実際、F. G. ユンガーも「現代の技術はこの自動化によって初めて独自の特徴を得、他の全ての時代の技術から区別される」と言い、「自動的に寸分違わぬ形で繰り返される機能、これが現代技術の主たる特徴である」と、この自動化の内に現代技術を根本的に特徴づけるものを見出している。

しかし、これに続けて「それら [自動機械] の役割は要するにレコード盤がいつも同じ曲を再現するのと同様、要求された労働工程を機械的に、寸分違わぬ形で繰り返すということである。」(PT, S. 39、邦訳、p. 57) と言われる。このような自動機械の増大によって人間が獲得する力は、逆に人間を支配する力を獲得するという (PT, S. 39、邦訳、p. 57参照)。なぜなら、機械と結びついた人間の仕事は機械的なものとなり、まさに機械的に、寸分違わぬ形で繰り返されるように求められるからである。こうして次のように結論づけられる。

自動化は今や人間自身をもとらえ、もはや解放することがない。(ibid.、同所)

後で見ると、人間があたかも機械の一部、その部品、歯車やネジでもあるかのように、始業開始の合図とともに「自動的に」労働せしめられるという仕方で支配されるのである。これはまさに、「総かり立て体制 (Gestell)」の渦の中に巻き込まれた人間存在が「人的資源 (Menschenmaterial)」と見なされることを喝破したハイデガーの立場を先取りしたものであるといえる⁵⁾。そこでは、同型画一性ということが

技術の根本特徴としてあげられており、人間存在はもはや自律的な主体として実存するものでは決してないと見定められていた。翻って、F. G. ユンガーの議論においても、技術によって産み出された自動機械（機械化された工場もまた一つの自動機械である）の求めに応じることを自ら拒むことのできない、従属的な存在に成り下がった人間存在が問題とされているのである。

したがって、技術と結びついた資本主義の下で、経済的に豊かになることが求められる場合には、生産工程はより効率的に、より多くの生産品を製造することが求められるため、技術の自動機械化に与することによって、人間存在は技術によって与えられるはずの時間を失うのである。あるいは幾分時間的な余暇が与えられたとしても、そこに流れているのは、時計によって計られ、機械的に繰り返される「死んだ時間」(PT, S. 40, 邦訳, p. 58) であるため、その下で労働する人間存在に「ゆとり」を与えることは決してないのである。そこで、次節においては「技術の完成」のもとの時間のあり方に焦点を当てたい。

2. 『技術の完成』における時間概念と自然科学

上述のような現代のメカニズムに基づく科学と技術における、人間にとっての死んだ時間との関連の中で、自然科学と機械化された時間について以下のように述べられている。

自然のメカニズムを認識することなくして自然科学は考えられない。(…中略…) このメカニズムがなければ、反復して、予測が可能となる確定性がないからであり、正確さ (Exaktheit) が生じえないからである。ここに言う正確さとは同じ原因からは同じ結果が繰り返されるという機械的信頼性にほかならない。したがって自然科学者を機械工と呼んだとしてもあながち誤りではない。実験に従事するにしろ、理論的研究を行うにしろ、自然のメカニズムを自らの思考のうちで再現する限りにおいてのみ、科学者としてもともに受け入れられる。自然のメカニズムを超え出るものは自然科学には属さない。(PT, S. 50, 邦訳, p. 72)

ここでは自然科学、あるいはそれに従事する者としての自然科学者のあり方が、自然科学的な「正確さ」を基礎づけるものとしての時間概念という観点から説明される。ここで重要なことは自然科学の出発点として、「自然のメカニズム (Mechanismus)

5) 上掲拙論「ハイデガーの技術論における人間存在—E. ユンガーの思想との交錯」参照。

の認識」が規定されていることである。プラトニストとして近代以降の「自然」の変容を問題とする藤沢汎夫によれば、「メカニズム」という語と同語源の「メカニックス」、すなわち「力学 (Mechanics)」は、その語の元にある「メーカナースタイ (mechanasthai)」もラテン語の「マーキナーレ (machinare)」も、「仕掛ける」「たくらむ (= 英語の *machinate*)」という意味を持っている、という⁶⁾。この「力学」が自然科学の基礎部門をなすものとして、実験と理論を通して自然を解明しようとすることは、まさに自然に対するたくらみであり、特に実験は、ある仕掛けを設けて、その人工的条件の元で自然の反応ぶりを見届けようという意図の元に、本来の自然状態のままでは見られない隠れた“正体”をあらわせと自然に迫ることにほかならない⁷⁾。そのような仕方では自然の本性を暴き出そうとする自然科学者とは、そもそもの初めから「機械工 (Mechaniker)」、すなわち「技術工」にはかならなかつたということである。古代ギリシアにおいては、職人達はその製作に興味と才能を発揮した比較的素朴な器具やからくり等を意味していたメーカナー (*mēchanē*) が、近代以降の自然科学の成立とともに、自然の機械的本性の「正確さ」を露わにしようとする、自然全体への「仕掛け」「たくらみ」としてもたらされるようになった。というのは、自然全体が均質で、同質的であれば、いついかなる場所においても、同じ原因から同じ結果が繰り返して生じるという「機械的信頼性」を保証することができないからである。「測定可能で正確に反復しうる時間のみが、認識論の理論家や、そして技術者の携わるものとなる」(PT, S. 54, 邦訳, p. 77) と言われるように、この機械的信頼性があってこそ、ある原因から生じる結果を予測することが可能となり、等質無限の絶対空間、絶対時間の下で、より正確な測定と予測が可能となるのである。この測定可能性、予測可能性、計算可能性に基づいて自然科学は可能になる。それゆえ、こうした機械論的自然観を採用することによって、自然科学とその応用としての技術は、進歩・発展してきたと行うことができる。しかしその一方で、このように永遠不変に存在するとされるガリレイ＝ニュートンの絶対空間、絶対時間は誰の生とも関連す

6) 藤沢汎夫「いま「自然」とは」(『岩波講座 転換期における人間第2巻 自然』(1989年、岩波書店) 所収) 24頁参照。さらに、藤沢汎夫『哲学の課題』(岩波書店、1989年)を参照。

7) 『存在と時間』の中で次のように言われるとき、ハイデガーもまたこうした事態を意識していたと考えられる。「この科学の形成のために決定的意義をもつのは、……自然そのものの数学的企投にあるのである。この企投が、恒常的に存在する客体(物質)を先行的に発見し、そしてこれの量的に規定される構成的諸契機(運動、力、位置ならびに時間)へ先導的に着目するための地平を開示するのである。このような形で企投される自然の《光のもとで》、初めて《事実》というようなものが発見され、そしてこの《事実》が、企投に基づいて規制的に画定された実験にかけられることになる。《事実科学》の《設立》が可能になったのは、《単なる事実》というようなものは原理的に存在しないということを、研究者たちが理解したことによるのである。」(M. Heidegger, *Sein und Zeit* (1927), S. 362)

るものではないが故に、それぞれ個々の人間存在の生と関係づけられた「生の空間」「生の時間」ではなく、いわば「死んだ時間」であると考えられているのである。

時計上の時間は死んだ時間、テンプス・モルトゥウム (Tempus mortuum) であり、そこでは一秒一秒が同じように繰り返される。時計によって計られるこの死んだ時間は、人間が生きている時間とともに、またその傍らで、それに構うことなく経過していく。生の時間では、どのような瞬間も同じではないが、そのような生の時間における浮き沈みに関与することなく、死んだ時間は経過していくのである。(S. 52、邦訳、p. 75)

ここで「死んだ時間」は「時計上」の、すなわち時計によって計られる「一秒一秒が同じように繰り返される」時間として規定される。この規定が自然科学によって前提されていた等質無限の絶対時間の表象と重ね合わせられることは容易に見て取れる。したがって、F. G. ユンガーにとっては、自然科学あるいは技術の世界における時間は、不可逆的に等質、等速で流れていく「死んだ時間」であるということになる。

それに対して「生の時間」は「どのような瞬間も決してほかの瞬間と同じではない」時間として規定されている。つまり、我々が自らの生において経験するのは、一方向的に数直線上を移動する「今」時点の連続として表象されるような自然科学的、「客観的」な時間ではなく、我々の生の中で、その生を規定する仕方に関連する生きられた時間なのである。我々は誰しも、こうした生の時間に即した経験を想起することができるだろう。それは何も、出生、入園・卒園、入学・卒業、就職、結婚、出産、病気、事故、そして死……といったような特別な出来事に限らない。それこそ表面上は毎日毎日、毎週毎週、毎月毎月、毎年毎年と、単調な反復にすぎないとみられる日常性における時間経過にあっても、あるいは年中行事や日々のルーティーンのように繰り返される出来事であっても、その一瞬一瞬は、実際には二度と経験しえない一回的な出来事として生起しているはずである。また同一の出来事であっても、個々それぞれの主体に応じてその捉え方が変化するものでもあり、場合によっては同一の主体であっても次の瞬間には全く異なる現れ方をすることも決して稀ではない。その意味では、この「死んだ時間」と「生の時間」の対照はそれほど理解に困難を伴うものではない。

機械的な時間概念こそは、精密な自然科学に発見や発明の能力を与えるものであり、すべての精密な自然科学をそもそも可能ならしめる。自然科学の精密さと

いう概念は、時間を機械的に把握することと分かちがたく結びついており、決して切り離すことができない。時計なくして自動機械は存在しないし、科学もまた存在しない。(PT, S. 51、邦訳、p. 73)

ここでは、科学にとっての時間の測定の重要性が述べられている。というのも、科学の作業は時間の測定によって絶えず制御されることによって初めて遂行されるからである。したがって時間の測定法が信頼性と正確さを勝ち得たところに初めて機械が生まれ、産業主義が始まり、技術が始まるのだとされる。その意味で、時間を測定する時計という機械の技術全体に対する重要性が強調されて、時計なくしては自動機械も科学も存在しないと言われるのである。そうすると、当然ながら次なる問いとして、そのように科学、あるいは技術の基礎づけの役割を果たす時間とは如何なるものであるのかが問われなければならない。例えば、その時間は空間とともに我々のアプリオリな直観形式をなすものであるのか、それとも個々の経験主体に即して流れるものであるのか、あるいは……というように、時間の存在様態、あるいは時間の存在そのものが問われなければならないのであるが、ここではこれ以上の論究はできない。少なくとも西洋近代以降は、ガリレイ＝ニュートン力学に基づいて、絶対空間、絶対時間が措定されており、これがその後の科学技術の進歩・発展の大きな礎となっている。

このように基礎を据えられた自然科学の発展に伴って技術もまた進歩する。その際生じてくる技術による「労働の専門化と細分化」ということについて、F. G. ユンガーは次のように言う。

技術が進歩するにつれ、機械による労働の増加がどのような結果をもたらすのか、次第にはっきりしてくる。単に、機械に携わる作業をさせられる人間が増加するにとどまらず、この労働自体がどんどん専門化していくのである。科学における専門化に並行して、技術も専門化する。個々の知識分野が実質的に独立することにより、人工的な分離や境界がもたらされるが、これに対応するのが技術で、技術においては人間の労働が分解され、細分化されていく。(PT, S. 67、邦訳、p. 95)

科学と技術の関係については、一般に理解されているように、所謂科学、すなわち純粋な学的探究としての自然科学が基礎研究として存在し、そこで得られた知見に基づいて現実的な場面に応用されたものが技術である、という単純な関係にあるのではなく、技術の進歩によって基礎研究としての科学が推進されるという関係にあると考

えられている⁸⁾ (同書、第26節参照)。この点は注意を要するが、ここで重要なことは、科学と技術が相互に関連し合って存在しているという点であろう。「科学」がその名の通り「分科の学」として個別の学問という概念をその由来としていることから明らかなように、科学はそもそもそれぞれの探究領域をその学の「根本概念」に基づいて切り出し、そこに存する対象をより深く、より詳細に探究することによってめざましい成果を上げてきた。その意味で、「科学」が個別科学として専門分化することは、自明の事柄であると言うことができる⁹⁾。

したがって、そうした科学と相互に関連する技術もまた専門化し、その機械的作業が細分化していくことも自明の理と言えよう。そのような機械的作業としての「労働」に携わる人間が、機械の部品の象徴としての「歯車」や「ネジ」に擬えられるのも首肯されることである。(PT, S. 141, 邦訳, p. 200参照) このように見ることでできるとすれば、すでに F. G. ユンガーは、ハイデガーが『技術への問い』において、技術に取り込まれる人間のあり方を代替可能性という概念によって捉えていた事柄を、先取りしていると言うことができる。こうした仕方では自らの携わる労働が「分解」され、「細分化」されることを通して、ハイデガーが指摘したように、個としての人間の存在はその存在の意味を剥奪されることとなり、自立した一個の実存ではあ

8) このような科学と技術の関係についての言及は、ハイデガーとアーレントにも共有されている。ハイデガーは『技術への問い』の中でまず、「現代技術はそれ以前のあらゆる技術とは比較にならないまったく別のものである、それは近代の精密な自然科学に基づいているのだから」という一般的な理解をあげた後、次のように言う。

いつの間にか、近年一層明確に認識されるようになったことは、逆もまた妥当するということである。すなわち、近代物理学は、実験的な学問として技術的装置と装置開発の進歩とに頼らざるをえない。技術と物理学との間のこのような相互関係を確認することは正しい。しかし、それは事実を単に歴史学的に (historisch) に確認するにとどまり、この相互関係がどこに基づいているのかについては何も言っていない。(M. Heidegger, Gesamtausgabe Bd. 7, S. 15)

またアーレントは、『人間の条件』第38節において、ガリレオの発見が意味するものは「もはや感覚の証拠能力に対する単なる挑戦」ではなく、望遠鏡という人工の器具による物理的な世界観の変貌ということであったという、「哲学者達の理解」に言及している。「つまり、新しい知識 (knowledge, Erkenntnis) は、観照、観察、思弁によってもたらされたのではなく、製作を事とする〈工人 (homo faber)〉が積極的に踏み込んできた結果、得られたもの」であったという。その結果かつての感覚的真理と理性に基づく合理的真理との対置は色を失うことになる。というのは、真理もリアリティも所与のものとして現れてくるのではなく、むしろ「現象に干渉したり、現象を取り除くことによって」初めて「真の知識」が得られるかもしれないということになるからである。

9) 同時にこのことは、フッサールとハイデガーによって「諸学問の危機」と呼ばれる。拙論「諸学問の危機と現象学—フッサールとハイデガーの思惟を手がかりにして—」(『愛媛大学法文学論集人文学編』第48号、2020年) 参照。

りえなくなってしまう。こうした事態を F. G. ユンガーが見ていたことは、次の記述からも理解される。

機械というものの特徴の一つは、あらゆる部品の差し替えや交換が可能だという点である。(……) しかし、機械を分割したり分解したりすることができるように、機械に対して行う労働、あるいは機械によって行われる労働もまた、分割・分解されうるものである。機械的労働は、時間を追って機械的に進行する個々の機能に分解することができ、ひいては労働者を機能的に働かせることにつながる。このとき労働は手作業に保たれていたあの身体的関連性 (körperliche Zusammenhang) を失う。(PT, S. 67、邦訳、pp. 95-96)

人間を機械の部品に喩えるこうした比喩は、E. ユンガーやハイデガーの議論の内にも見出されていた¹⁰⁾。そこではまさに一つの「類型」と化した労働者の「代替可能性」という概念が問題とされていた。そこで次節においては『技術の完成』の下での労働者のあり方を確認しておきたい。

3. 『技術の完成』における労働者と総動員

上述のように機械的労働によって人間存在そのものが変容することから、「労働者 (der Arbeiter)」という観念も変容を被ることになる。その点に関して F. G. ユンガーは、次のように言う。

労働者の従属性はさしあたり経済的なものとして把握された。そこに誤解がある。この過程の経済学的な側面を隅々まではっきりと叙述したマルクスは、その技術的な諸条件に対しては決して十分な洞察をしなかった。しかし、労働者の従属性は最初の最初から作業に即したものであり、つまり、彼は工場の機械システムに従属しているのである。(……) 工場の機械システムへの従属は労働者の人生を規定し、変形し、人生に印をつける (……) 機械的労働に服している者はすべて、この新しい意味での労働者 (Arbeiter) となる。(PT, S. 72f、邦訳、pp. 102-103)

ここで F. G. ユンガーは、兄の E. ユンガーの労働者論を承けて、従来の「働く

10) 上掲拙論「ハイデガーの技術論における人間存在—E. ユンガーの思想との交錯」参照。

(arbeiten) 人」という意味に新しい意味が付け加わった「労働者」という語を定義している。労働者について考察するに際して、まずマルクスについて言及され、その経済学的側面からする分析、記述を評価する反面、マルクスがその技術的側面を看過している点を指摘する。ここで問題とされているのは、単に「働く人」というだけではなく、機械的組織に従属せしめられて、機械システムの中で機械的作業に服する者という新しい意味での「労働者」ということである。

ここに見られる労働者の位置づけは明らかに負の価値を背負ったものである。その点で言えば、「労働者」を新たな人間類型として、ある意味では積極的に評価しようとしていた兄の E. ユンガーとは立場を異にすると考えられる。その意味では、労働者のあり方を否定的に捉えた1930年代後半以降のハイデガーの思惟と通じるものがある。また、F. G. ユンガーが機械的労働に従事していない農民や商人、職人をこの新しい意味での「労働者」から除外するという仕方では「労働者」の条件を機械的労働として掲げている点は、ハイデガーの「総かり立て体制」の考え方も通じ合う。というのは、ハイデガーは現代技術の本質を論じるにあたって、農業もまたかつての耕し、育てる仕事ではなくなり、食糧生産産業へと変容してしまったことを含めて批判していたからである。ハイデガーの言う食糧産業としての農業が機械化され、技術化された農業を念頭においていると考えれば、F. G. ユンガーの議論との間にほとんど齟齬はないとも考えられる。実際 F. G. ユンガーは、大地の女神デメテルに言及することが多いが、これはハイデガーの四方域 (Geviert) の中の大地、あるいは原存在 (Sein) としてのピュシス、すなわち自然に通じるものであるとも考えられる。例えば次のような次第である。

大地は大地を利用し浪費することしか頭にない人間には耐えられない。それで立ちどころに人間に対して協力を拒むのだ。これは誠実な農夫なら誰でも知っている女神デメテルの神秘の一つである。人間は自分の手で育てた動植物で利益を得てもよいが、同時にいつも女神に犠牲を捧げる義務がある。(PT, S. 36、邦訳、p. 53)

これに先立つ部分で F. G. ユンガーは、「エコノミーと大地の掟」という主題の下、「オイコス ノモス 収奪」を家計の秩序に従わない家父長のなすような乱脈経営の最もひどい形態として規定した上で、「技術的組織の中で生きている人間が大地に対して行うのはこの収奪なのである」(PT, S. 36、邦訳、p. 52) と述べている。したがって、ここでは技術的組織に基づいてなされる大地への収奪のあり方が問題とされている。そうしたあり方は、「植物を植え付け、育て、栽培する人間、または動物を世話する人間」の「と

でも単純な原則」(ibid.、同所)との対比の中で語られているが、その原則とは「彼の保護に委ねられているものたちの成長に心を配るときだけ、この仕事を首尾よく行うことができる」というものである。そしてそれが「誠実な農夫なら誰でも知っている女神デメーテルの神秘の一つ」と連関させられているのである。ここから我々はF. G. ユンガーが農業をなす農夫を「労働者」に数え入れなかったことの原因を知ることができる。「トラクター」を用いた「単一栽培」(PT, S. 37, 邦訳, p. 53)に象徴される機械技術によって規定された労働工程の一貫としての「農業」(ハイデガーの言い方では「食糧産業」)ではなく、女神デメーテルへの犠牲を忘れない「誠実な農夫」のあり方がF. G. ユンガーの念頭に置かれているからであろう。そして、我々はここで肯定的に語られている農業のあり方が「大地 (die Erde)」に根ざしたものとされていることから、やはりハイデガーの四方域の中での大地のあり方に思い至ることになる。ここでも我々は、F. G. ユンガーの技術への立場が、ハイデガーの「技術への問い」の内に反響していることを見出せるであろう。つまり、ハイデガーが現代の農業を「機械化された食糧産業」と称するとき、それ以前の大地を耕し、世話をすると言う意味での 'bauen', 'bestellen' との対比の中で語っていたことは、F. G. ユンガーの上述の議論とほとんどずれなく対応しているのである。

しかしここで重要なのは、どちらが先で、どちらが後かといった優先性の問題を論じることではない。そうではなくて、20世紀半ばの先見の明ある二人の思索者が現代の同一の根本問題を見てとっていたという事実であろう。

以上のような文脈を承けて導入されるのが「総動員 (die totale Mobilmachung)」、 「総力戦 (die totale Krieg)」の概念である (PT, S. 158, 邦訳, p. 223)。

ここで総力戦が言及されるのは、F. G. ユンガーも、また兄のE. ユンガーも経験した第一次世界大戦が念頭におかれており、自身の直接経験に基づいて語られていると考えられる。そこでF. G. ユンガーは「総力戦とは総ての技術的組織を前提とする戦争である」(PT, S. 159, p. 224)と定義したうえで、総力戦は「戦争準備」においても「戦略的戦術的手段と目的」に関しても、また「もはやいかなる手加減も加えない仮借なき破壊思想」によっても「全面的」である、とされる。しかし、その一方で、この戦争にも抑制が働くし、最大限の力の行使を迫る傾向も、「制約と軽減」に従わざるをえない、と述べた上でその「制約」について次のように言う。

制約とは次の点にある。すなわち、あらゆる手段を動員する戦争は、力の拮抗した敵同士で戦われるとき、すべての在庫 (Bestand) の枯渇もまた招かざるをえないのである。(PT, S. 159, 邦訳, p. 225)

ここにさりげなく「在庫 (Bestand)」という語が用いられていることに注目しなければならない。言うまでもなくこの 'Bestand' という語はハイデガーの技術論において、「用象」あるいは「徴用されて立てられたもの」という訳し方をされる語である。ハイデガーに従えば、技術の時代においては、物資と同様に人間存在もまた「人的資源」、「人材」として、諸々の労働に労力を提供する「在庫」として存在せざるをえない。その意味では技術時代における人間存在は労働力として用立てられ、徴用されたものであり、雇用されたもの、被雇用者 (der Angestellte) なのである。

実際のところ、F. G. ユンガーも「物量戦を戦っている兵士もいわば労働者なのである」(PT, S. 159f.、邦訳、p. 225) と規定して次のように言う。

そもそも技術化が進んだ状態においては労働関係が決定的な意味を持つから、そうした状態に生きる者は誰でも労働者なのだ。

ここから理解されることは、戦争時に戦争遂行という唯一の目的のためにあらゆる物資を徴用して投入し、「兵士」として人的資源をも徴用する総動員のあり方が、もはや戦時にのみ見られる特異な事態ではなく、戦時と平時の区別なく我々の日常の労働のあり方の内に見出されるということである。戦時においては戦争遂行のための「弾」と見なされていた人間存在が、今や平時においては「歯車」や「ネジ」と見なされるということである。こうした事態の認識もまた現代の我々の現実を鋭く射貫いたものであると同時に、E. ユンガーの市民ではなく「兵士」としての労働者理解を踏まえ、ハイデガーの技術批判の中での「徴用物資」、「人的資源」としての人間理解に深く通じるものである。

結 語

以上の考察から、この『技術の完成』の記述と内容が、兄 E. ユンガーの「総動員」、「労働者」の議論を踏まえると同時に、ハイデガーの技術論を理解する上で非常に重要な基礎を提供するということが確認された。E. ユンガーからの影響はある意味では当然とも言えるが、ハイデガーの技術論との親近性（と言うべきか、相同性と言うべきか）については注目に値するものがあると考えられる。その意味で、ハイデガーの技術批判を F. G. ユンガーの議論と照らし合わせて読み直すことで、ハイデガーのテキスト解釈にながしかの光が与えられることになろう。

しかし、我々はここで見られた事柄を、単にハイデガーの技術論を理解するための思想史的、文献学的考察としてのみ理解すべきではないであろう。むしろ我々に

求められているのは、ここで露わにされた事柄を、「企業戦士」や「一億総活躍社会」といった言葉にもはや何の違和感も抱かなくなってしまった我々自身の喫緊の問題、課題として受け止めることであろう。そのような現代の我々自身に、ユンガー兄弟とハイデガーの思惟は重要な示唆を与えているのである。その示唆の下に自らへの問いを立て、現実に向き合っていくことが、ここで取り上げられたテキストを通して、彼らの思惟を受け取った我々に課せられた使命であろう。この点を確認して、本稿を閉じたい。